



稲妻の遠くに光る花火かな

子規

この時季、つい口ずさむ歌があります。

学生の頃、歌声喫茶で歌われていた吉田拓郎よしだたくろうさんの「夏休み」という曲です。メロデーも好きですが、郷愁を誘う歌詞は深く心に残っています。

「麦わら帽子、畑のトンボ、ヒマワリ、夕立、セミの声……。特に、三番を歌うと今でも心が熱くなります。

指を数えながら待っていた夏休み。1・2年生の絵日記にはセミ捕りや花火をよく書いていました。真っ黒に日焼けした顔で、夕方遅くまで遊び回っていた頃が懐かしく思い出されます。

夕立、ぬれないように木陰を目指して木から木へ走っていた光景が目に見えかねません。

薄い雲を通して明るい空から降る雨を「白雨はくう」といいます。夕立の別名で夏の季語になっています。

遊んでいた子どもたちが不意の雨をよけながら、木陰から木陰を伝って走っていく姿は今や昔の光景です。

白雨。雨の呼び名は数ある中でも、美しい言葉です。

梅雨が明け夏休みが始まります。この時期になると白雨のお湿りが恋しい時季です。

暮らしにリズムと潤いを与えてくれるのが夏祭りです。

祭りは、当日までに煩雑な準備作業を必要とします。それにもかかわらず、地域の祭りをもり立てようとすする試みは各地に見られます。

祭りは、孤立した人と人を出会わせ、共同作業を促す契機になります。現代の人と社会は、かつてなく切実に祭りを必要としているように思います。

途切れて久しい祭りでもいい、まったく新しい祭りでもいい、地区の小さな盆踊りでもいい、地域で祭りをつくる

うという機運が生まれたら、それを大事に育ててほしいものです。地域を内側から輝かせる力が、祭りにはあります。祭りは、子どもたちの夢を育み郷土愛の醸成のためにも大切だと思います。

夏祭りは、均質化し平板になつた暮らしにリズムと潤いをもたらしてくれます。近隣とのかかわりが薄れつつある中で、共同体のぬくもりを思い出させます。今日ほど夏祭りを必要としている時代はありません。

やがて梅雨が明け本格的な夏の到来です。7月になると六月灯も始まります。「ロツガードー」と聞いただけで、子どもの頃は心が躍ったものです。



指宿市長
豊留悦男